

産医大病院に恩返し

低体重で出生の中学生 お年玉を寄付

「命を助けてもらった病院に恩返しをしたい」。低出生体重児だった広島県福山市の中学2年藤原彩希さん(13)が、出生時に支えてもらった産業医科大病院(八幡西区)にお年玉をためて寄付金を贈った。病院側は「医療従事者にとってこんなうれしいことはない」と感謝している。

「子ども救う環境整備に」

藤原さんは2009年9月、八幡西区出身の母幸代さんの里帰り出産で、同病院で生まれた。出生時の体重は2242g。新生児集中治療室(NICU)で1週間過ごし、その後は元気に育ったという。

「自分のような子どもを救う環境整備に少しでも役に立てば」と、毎年ためてきたお年玉計12万円を病院に寄付した。

現在も同級生の中では体が小さく、幼少期から自分の体に異常はないか気にしながら生きてきた。同病院の検査で健康と診断されていると幸代さんから聞き、安心して生活



産業医科大病院の急性期診療棟を見学する藤原彩希さん(手前)
(産業医科大提供)

急性期診療棟は今年17日に開設。7月29日に完成を祝う式典があり、藤原さんも招かれた。会場では、寄付した企業の代表者らとともに居並ぶ中学生に注目が集まった。

藤原さんは医療工学に興味があり、診療棟の内覧会では最新鋭の医療機器をゆつくり見学。オンラインで取材に応じた藤原さんは「今の自分があるのは産業医科大病院のおかげ。本当に感謝しています」と話している。(村田直隆)

(掲載について西日本新聞社許諾済、無断転載(コピー、スマートフォン等での撮影)禁止)